

どうも、リュウです。

今回のレポートでは、**第 64・65 代内閣総理大臣の田中角栄**を題材にして、吃音克服のヒントを探っていこうと思います。

なぜ田中角栄元総理を取り上げるのか？と言うと、彼も幼少期から吃音を抱えていた「**吃音者**」だったからです。

まず、彼の経歴を簡単にご紹介しますね。

彼は、1918 年に新潟県刈羽群で生まれます。

とても寒い地域なんですが、実家は農家で、

角栄は次男として生まれます。

どのような暮らしだったのかと言うと、「**極貧生活**」でした。

父の事業が災難により赤字だったためだと言われています。

そのため、角栄は幼い頃から家のために必死で働いてきました。

14才で高等小学校を卒業した後は工事現場で働き始めますが、  
そこは1年で辞めることになります。

その後は県の土木派遣事務所に行くことになり、  
現場で働く人達を纏める立場の人間となって仕事をしました。  
現場監督という立場ですね。

角栄はそこで、人を使うということはどんなことなのかを知り、  
同時に権力の偉大さを知るようになります。

その後上京し、住み込みで夜間の土木学校に通い、  
21才のときに「共栄建築事務所」を設立するまで至ります。

そしてなんやかんやあって、29才のときに新潟三区選挙で当選し、  
政治家の道を歩むことになっていったのです。

で、話を冒頭に戻すのですが、

角栄は幼少期から「吃音」を持っていました。

細かい発病のキッカケは分からないのですが、

幼少期の劣悪な環境からのストレスが原因だった可能性があります。

ともかく、偉人と言われたあの田中角栄元総理は

「吃音」を持っていたということは紛れも無い事実です。

まあ、これは知っている人も多いかと思います。

田中角栄元総理の数々のエピソードについては

多数の本が出版されていますので、

詳しい内容はそちらをご参考になってください。

今回のレポートで僕が伝えたいのは、

**「田中角栄から学ぶ、吃音克服のヒント」**です。

ヒントと言っていますが、

吃音克服のあるべき姿とも言えるでしょう。

角栄は、幼き頃から吃音に悩まされてきましたが、

「三味線を伴奏にして独特の節と語りで物語をすすめる語り芸である“浪花節(なにわぶし)”と呼ばれる演芸」を練習することで吃音を克服したそうです。

角栄の吃音症の程度がどの程度だったのかは分かりませんが、浪花節による練習は彼にとって相性の良かった克服法だったのかもしれません。

紆余曲折ありながらも、角栄は吃音を自身の「武器」に変えることで、多くの人を魅了してきました。

具体的に、吃音をどのようにして「武器」にしたのかと言うと、“自分が言いやすく話しやすい独特の喋り方を身につける”ことでした。

吃音者特有の早口は治っていなかったようですが、浪花節のような独特のリズムと節がかすかに垣間見えるような話し方を身につけました。

彼はトレーニングによって、

**吃らないで話せる特有の話し方を身に付けていったようです。**

この独特の話し方によって彼は、多くの人の心を惹きつけ、魅了し、敵ですら味方に変えるほどのカリスマ力を遺憾無く発揮していくことになったのです。

もちろん、そこまでの力を発揮できたのは吃音によるものだけではなかったと思いますが、彼が吃音を自身の「**強み**」に変えたことは事実なんですね。

この角栄の姿・背中から我々が学ぶべきものは、

**「吃音は自分の敵ではなく、最大の味方となってくれるもの」**

ということです。

僕がブログなどで言っていることは、

こういうところからきています。

吃音は、自分にとっての最大の「**武器**」であるということ。

吃音は、捉え方次第で敵にも味方にもなるということです。

我々は、吃音を「武器」にしていくことと同時に、

「味方」にしていく必要があるのです。

そう、田中角栄元総理のように。

彼もおそらく、当初は吃音を嫌っていたかもしれないし、

吃音を持つ自分を恨んでいたかもしれません。

でも彼は、吃音を「武器」にすることに成功し、紆余曲折ありながら、無名から頂点まで登り詰めていったのですね。

『へ～、凄い人なんだね！』で終わってはいけません。

『要は音読練習で吃音を克服したんでしょ？

それって、角栄だったから出来たんじゃん』

違います。

重要視してほしいところは、

**吃音を持ちながらもそれをハンデとせず、  
総理大臣という日本のトップにまで登り詰めた事実**

です。

あなたも、田中角栄元総理のようになることができます。

『総理大臣にまでなれ』と言っているワケではありません。

吃音を「武器」に変えることはあなたにも出来る、  
と言っているのです。

彼は吃音者という自分を精神的に弱い人間などとは絶対に思わず、  
吃音を持ちながらもそれをコントロールできるような

自分専用の吃音処世術を獲得したのです。

ポイントは、

“吃音を持つ自分を弱い存在だと絶対に思わなかった”

というところです。

僕がブログなどでお伝えしているとおりですよ。

吃音は「感情」に深い関わりを持つ症状ですから、

吃音を持つ自分を絶対に否定してはなりません。

でも悲しいことに、大半の吃音者の方は自分を自ら悪い方に追い込んでしまっています。

やはり、それではダメです。

その状態では、一生吃音なんか克服できないんです。

吃音克服なんか夢のまた夢で終わってしまうのです。

**あなたは、そうなりたいですか？**

**なりたくないですよ。**

吃音を乗り越えたからと言って、

明日から急に吃らずスラスラと話せるようになる

というものではありません。

なぜなら、吃音は身体的な症状ではないので、

それを取り除くことで症状が回復するというものではないからです。

薬を飲んで安静にしていれば治る風邪のようなものではありません。

吃音は感情に深くリンクしているので、  
当事者の考え方を改善していく必要があるんですね。

吃音というのは、我々にとっての

「味方」でもあり、

「最大の武器」でもあり、

「課題」でもあるのです。

これが何を意味するのか？は、

ここまで読んでいただけたあなたならきっと分かると

僕は思います。

田中角栄元総理は、1993年12月16日に75歳で没しました。

彼は日本の総理大臣であったのと同時に、

1人の吃音者でもありました。

僕は、吃音者や非吃音者という垣根を超えて、  
彼から学ぶ必要があると思っています。

田中角栄元総理について興味が出てきた人は、  
是非とも書籍等で学んでみてください。

吃音を抜きにして見ても、参考になるところは多いです。  
その当時の時代のことも大変勉強になりますので、おススメですね。

では、今回はこのあたりで終わりたいと思います。

最後までご精読いただき、ありがとうございました！

<最後に、おまけアリ↓>

## 【田中角栄の名言集一部抜擢】

※個人的な主観に基づき挙げさせていただきます。

どんな境遇におかれて辛い思いをしても、天も地も人も恨まない。

俺は戦争には行ったが、自分の手で人を殺したことが  
一度もなかったことを一番幸せだと思っている。

人は実感したものを信用する。

メシ時になったら、しっかりメシを食え。

シャバにはいいことは少ない。いやなことばかりだ。

それを苦にしてメシが食えないようではダメだ。

腹が減って、目が回って、大事な戦はできん。

失敗はイヤというほどしたほうがいい。

そうすると、バカでないかぎり、骨身に沁みる。

判断力、分別ができてくる。これが成長の正体だ。

自分の物差しばかりでものを言っちゃいかんということだ。

世の中には人の為には働かない。で、文句ばかり言う

横着な人間が少なくない。こういうのはダメだ。使いものにならない。

個人にとっても、社会にとっても本当に必要なのは、学歴ではなくて、

学問だよ。学歴と云うものは年が経っていけば、ただ過去の栄光みた

いなものになってしまう。学問は現在に生きている。

約束したら、必ず責任を果たせ。できない約束はするな。

ヘビの生殺しはするな。借りた金は忘れるな。貸した金は忘れろ。

時間の守れん人間は、何をやってもダメだ。

人間誰しも、若いときはみな偉くなりたいと思うもんだが、  
簡単にはなれない。経験も知識も素養も無くてしゃべっているのは、  
バカ騒ぎを繰り返しているだけで、しまいには誰も相手にしなくなる。  
る。

ウソはつくな。すぐばれる。気の利いたことは云うな。

後が続かなくなる。そして何より、自分の言葉でしゃべることだ。

とにかく、人の悪口をいったり、自分が過去に犯した過ちを反省せずに、自分がすべて正しいとする考え方は、国のなかでも外でも通用しない。そういう考えの人には一人で山の中に住んでもらうことだよ。

やっぱり経験というものは大事です。しかし、普通は経験だけでもものを云うからダメなんだ。私はそうじゃなくて、経験のほかに統計とか、そういうものを非常に重視している。

肉食獣は自らエサが獲れなくなると、死を意味するんだ。

人間も、エサを獲らないでいいとなると、痴呆状態になる。

名指しで非難せず、叱る時はサシでやる。

褒める時は大勢の前で褒めることだ。

一体引き受けてくれるのかくれないのか、イエスノーのない奴が少  
なくない。頼んだ方は結論を急いでいる。うまいことを言って、中途  
半端、曖昧にするのが一番いけない。自信が無ければ、はっきりとノ  
ーと言え。ノーと言うのは確かに勇気がある。しかし、長い目で見れ  
ば信用されることが多い。ノーで信頼度が高まる場合もある。

だいたい日本人は無駄な挨拶が長すぎるね。時候の挨拶から始まっ  
て世間話をダラダラとしないと失礼だと思っている。そして、その後  
でこれこれの要件で参りましたと云って、又その不必要ないきさつ  
についてまで話してから初めて本題に入る。これは、お互いの時間が  
損すると思うね。挨拶は『今日は』だけでいい。そして、今日の要件  
はこれこれですと話すだけでいいんじゃないかね。そうすれば私も  
その場で、できるとかできないとか結論を出す。これでお互いに気持  
ち良く用が足りるのだ。

私が大切にしているのは、何よりも人との接し方だ。戦術や戦略じゃない。会って話をされていて安心感があるとか、自分のためになるとか、そういうことが人と人をつなげる。

嫌なことは、その日のうちに忘れろ。

自分でどうにもならぬのにクヨクヨするのは阿呆だ。

食って、寝て、嫌なことは忘れることが一番。

カネというものはチマチマ使うより、

ここぞというときは一気に使え。その方が、効果は何倍も大きい。

自分一人では何事も成り難い。周りにはいる人々が、支えていてくれるのだ。それがあって、初めて自分が生きていける。

浪花節——あれはいいよ。ペーソス（哀愁）があって、義理と人情  
があって、やはり日本人の体質には、ぴったりくるものがあるんだろ  
うな。

分かったようなことを言うな。気の利いたことを言うな。そんなもの  
は聞いている者は一発で見抜く。借り物でない自分の言葉で、全力で  
話せ。そうすれば、初めて人が聞く耳を持ってくれる。

電話は、用件だけでいいんだ。馬鹿ほど長電話をするんだ。